

第50号

緑の相談所だより

冬～早春号 1998. 2. 1発行 編集：旭川市緑の相談所

講習会のお知らせ

バラの育て方

日時 2月8日(日)
午後1～3時

講師 旭川市緑の相談所
相談員 佐野元雄

定員 50名 無料

果樹の剪定・手入れ

日時 2月22日(日)
午後1～3時

講師 旭川市緑の相談所
相談員 佐野元雄

定員 50名 無料

洋らん春・夏の管理

日時 3月8日(日)
午後1～3時

講師 旭川らん友会
会長 笠原幸三氏

定員 50名 無料

サギ草、タイリントキソウの 植え方、育て方

日時 3月22日(日)
午後1～3時

講師 旭川市緑の相談所
相談員 佐野元雄

定員 50名

材料費 1,300円

(球根、鉢、水苔代
として)



お申し込み
お問い合わせ

旭川市緑の相談所(上川神社隣り) ☎65-5553

サギソウを植える方法

今にも雪に覆いあがりそうな冬のサギソウ。
東北地方以西の

きれいな流水がゆるやかに流れ、肥料分が少ないところ、
春は、そのまわりの草がまた伸びていらないので日当たりが

球根は、10月以降の栽培を希望する場合は、10月以降に

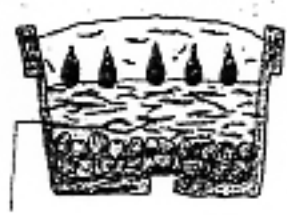


植 え つ け

4月～5月上旬ころの、新芽があまり伸びないうちに行い
ます。

鉢は素焼き鉢、駄温鉢、浅い木箱などが良いでしょう。
鉢底にゴロ土を入れ、水につけてからしぼったミスゴケを厚
さ約2センチほどやや硬めに横並びにおきます。
この時ミスゴケは必ず新しいものを使います。

— ミスゴケ種入 —



ミスゴケ
(2cm厚)

球根は芽の出るほうを上にして
間隔をとりながら並べ、そのまわり
にミスゴケを詰め、球根がやや隠
れる程度にミスゴケをかぶせ、
水をたっぷり与えます。

置 き 場 所

戸外で5月中は日当たりのよいところに。6月中旬
からは朝のうち2時間ほど日が当たり、あとは木漏れ日程度で風通しの良い
ところに置きます。

水 や り と 肥 料

水はきらさないようにたっぷりと。但し過湿は禁物。

肥料はないほうが自然のままの野性味が出ますが、球根をふやし花を多くつけ
るには、5月下旬から月に一度くらいハイポネックスの1,000～2,000倍液などを
与えます。(真夏を除き9月まで)

手 入 れ

開花後も乾かさないうちに水を与えます。花期は産地によってちがいますが夏。
秋、花が終わり茎が枯れたら切り取り、鉢はそのまま軽く乾燥させます。
上から雨水が入らないようにし、地面に置いたまま雪の下にして越冬させますが、
雪の降る前と雪解け後の凍結は禁物です。

球根を冷蔵庫の野菜室などに湿らせたミスゴケでくるみ貯蔵するのが安全です。

花の咲く枝 ・ 実を着ける枝 (春の剪定)

2月が過ぎ3月に入りますと、厳しい寒気も遠退き、日差しも強くなってきます。そろそろ今年の庭仕事や春先の園芸作業のことが気になる頃です。

雪解け前に済ましておきたい作業として、先ず花木や果樹の剪定があります。この剪定作業は木の形を整えるためでもありますが、花木・果樹の場合は花や実に育つ「花芽」の着く枝の残し方、育て方が大切になってきます。

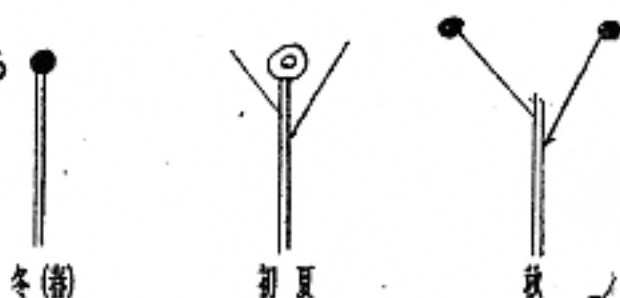
特に年数を経た花木や果樹になりますと狭い場所に枝が繁りすぎ、花つき、実つきが少なくなってきます。この場合は枝振りを整理することで木を若返らせ、花つき、実つきを回復させることができます。又陽当たりが悪かったり、肥料の効きが良く枝葉が繁りすぎ混みあうような状態では花芽は少なくなります。花芽を着ける第一のコツは陽当たりの良い方向に新梢を伸ばすことです。

花芽の着く枝と位置は種類によって様々です。間違っして花芽を切り取ることをないように残す枝を選びます。

ア 昨年伸びた枝の先端部に花芽がある

・ ツツジ、ライラック、アジサイ等

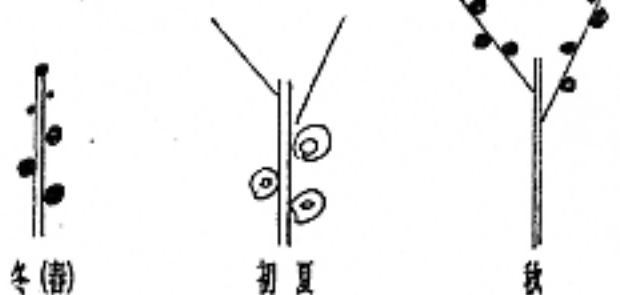
・ ブルーベリー



イ 昨年伸びた枝の各節に花芽がある

・ ウメ、サクラ、モモ

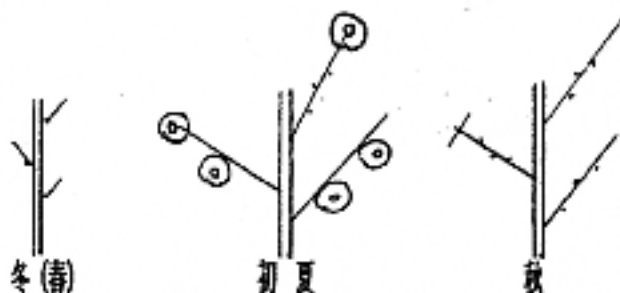
・ オウトウ、スモモ、



ウ 今年春伸びる新梢に着花(果)

・ バラ、ムクゲ、ハギ

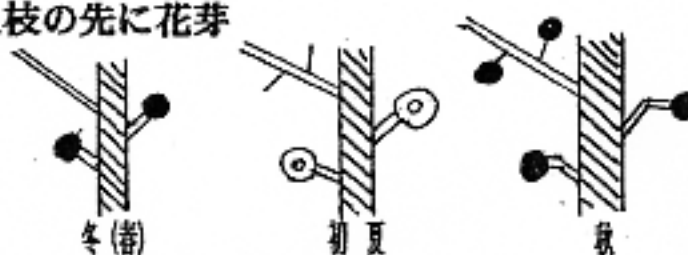
・ ブドウ、ラズベリー



エ 1 去年の枝から昨年短く伸びた枝の先に花芽

・ ピラカンサ、ハナミズキ

・ リンゴ、ナシ



植物が人間の管理下で健全に育つための栄養源が肥料です。肥料は植物にとっては食べ物ですからその中味によって体への効果が変わってきます。その点、私達の食物と同じですが、植物では、肥料の三要素と言われる、

- A 体を大きくするための食べ物・・・葉や枝を繁らせ体を大きくするための成分で生育の初期に必要な（主に窒素成分で硝酸態窒素として吸収される）
- B 体を丈夫にするための食べ物・・・繊維を丈夫にしたり、細胞液の濃度を高くしたり、体を支える役目をするためのもので生育の後期に必要な（主に加里、カルシウム成分）
- C 子孫を残すのに必要な食べ物・・・花芽の分化や果実の成熟を促すための成分で、生育の後期に必要な（主に磷酸成分）

の大きく三つに区別することができます。この他に吸収する量は少なくても良いがなくてはならない、微量要素と呼ばれる成分があります。

水に溶けて、イオンと呼ばれる状態になってはじめて植物の根から吸収されます。化学肥料は水に溶かすとこの状態になりますが、このとき、植物が吸収できない成分が約半分ほど水の中に残る仕組みになっています。油粕や米ぬかなどは未分解では吸収されません。動植物の体は長い間かかって微生物により分解され、イオンの状態になり、根から吸収されていきます。そのとき、余分な成分が土の中に残ることはありません。有機質肥料が環境にやさしいのはこのためです。

植物の生育は私達のサイクルとは異なり、1年の内の季節によって変化します。従って、肥料を与える時期・質・量が問題となります。

生育の初期（大抵の植物は春から初夏にかけて）は、前記のAを主体に、生育の後期（大抵の植物は秋）にはBとCを主体に肥料やりをします。主体に、ということとはどの時期でもこの成分だけでいいということではなく、時期に応じたバランスが必要だからです。一方、真夏と冬は多くの植物は根をのぼしません。従って、肥料は吸収できずにお休みということになります。植物は根の活動中しか養分を吸収しません。植物が吸収しない時期に肥料を与えると、根を痛めることになります。他方、植物は動物と異なり、根が伸びている最中は、お腹がいっぱい！ ということはありません。与えられた養分は、濃すぎない限りその内容に関わらず無制限に吸収を続けるため、肥料のやり方を間違えると後でツケが回ってきます。花が咲かなかったり、病気にかかり易くなったり、伸びすぎたり、場合によっては縮んでしまったりします。生育の段階に応じて、時期にあった肥料を、適量与えることが肝心です。市販の肥料にはその内容成分が表示されているので、確認の上使うことです。

植物は種類や環境によって生育のサイクルを異にするので、肥料やりは、「サイクルに合わせ、薄めのもの」を施すことが大切です。